

令和 5 年 6 月 1 4 日現在

機関番号：3 2 6 9 0

研究種目：若手研究

研究期間：2019 ~ 2022

課題番号：1 9 K 1 2 9 3 8

研究課題名（和文）道徳の規範性の説明を通じた自然主義的なメタ倫理説の擁護

研究課題名（英文）In Defence of Naturalistic Metaethical Theory through Explaining the Normativity of Morality

研究代表者

蝶名林 亮（Chonabayashi, Ryo）

創価大学・文学部・准教授

研究者番号：1 0 8 0 2 1 8 4

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では自然主義の理論的枠組みの中で道徳の規範性に関する説得的な説明を示すことができるのか、との問いを掲げ、次の二点の擁護を試みた。自然主義は、非自然主義者などの反対者によってその実在が疑われるような仕方ではしか説明されない道徳の規範性について、より説得力のある実質的な説明を与えることに成功する考えであり、その意味で、他のメタ倫理説よりも理論的に優位な地位にある。そのような形で明確にされた道徳の規範性が、われわれが偶然に持つ選好などに依存することなく、全ての人に課せられていることを、自然主義は成功裡に説明することができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではこれまでメタ倫理学においてなされてきた自然主義的な提案を検討し、その現状を確認した。その上で、道徳的説明に訴える伝統的な自然主義的な手法の重要性を再確認し、道徳的説明を関連する経験的知見に訴えてより強固に擁護するという「局所主義的な道徳的説明の擁護」という研究手法の着想を得るに至った。この手法はこれまで（自然主義的な提案でありながら）思弁的なものに留まる傾向性のあったメタ倫理学上の自然主義をより自然主義的な説へと向かわせるものである一方で、比較政治学などこれまであまり哲学との接点が指摘されてこなかった分野との横断的な研究をより加速させる可能性を包含するものである。

研究成果の概要（英文）：This research attempted to provide a successful explanation of the normativity of morality within the naturalistic perspective, particular defending the following two claims. First, unlike non-naturalism, naturalism succeeds in providing a substantial explanation of the normativity of morality and such a substantial explanation blocks the irrealist worry that there is actually no such strong normativity of morality. Second, the normativity of morality explained from the naturalistic perspective is strong enough in the sense that whether we ought to follow the rules of morality does not depend on contingent desires we happen to have: regardless of the contents of our contingent desires, we have strong reason to follow moral rules.

研究分野：メタ倫理学

キーワード：メタ倫理学 自然主義 規範性 道徳的説明

1. 研究開始当初の背景

現代メタ倫理学において「自然主義道徳的実在論」(以下、「自然主義」と表記する)と呼ばれるメタ倫理学上の立場が多く、多くの論者によって提案されている。自然主義者は、倫理的な問いも突き詰めれば経験科学上の問いと同様に観察・実験によって検証することが可能であると主張し、そのような経験的手法によって、倫理・道徳にもわれわれの主観的判断を超えた客観性があることを示すことができると主張する。倫理学を経験科学と類比的に考えることでその客観性を担保しようとするこのような自然主義的な試みは、経験的現象の最良の説明には道徳的性質への言及が必要であるとする N・スタージョンや B・ボイドらコーネル実在論者や、他の自然的性質への価値の還元によってその実在性を擁護しようとする P・レイルトンや M・シュローダーらによって進められており、現代の英米圏のメタ倫学研究において重要な位置を占めている。

さて、この立場は道徳の規範性の説明について課題を有していると考えられている。自然主義者は典型的に「虐待は悪い」などの道徳的主張は「虐待は苦痛を発生させる」などの観察可能な事実によって還元できると主張し、その客観性を確保しようと試みる。しかし、このような試みには困難さが付きまとう。「虐待は悪い」という主張は、われわれに虐待という行為を避けさせる一種の規範性が表現されているように見えるが、「苦痛を発生させる」という表現にはそれが表されているようには見えない。つまり、道徳が特徴的に持つ規範性が自然主義の枠組みでは説明できないのではないかと懸念が浮かんでくる。道徳の規範性を観察可能な自然的事実に還元しようとした場合、その還元先として自然主義が訴えることができるものは欲求の充足などであり、道徳に関心のない人にも道徳の規範性が課せられていることを説明できないとも指摘される。道徳に客観性があることを主張する自然主義にとって、このような問題は克服しなければならない重要な課題である。

2. 研究の目的

本研究では自然主義の理論的枠組みの中で道徳の規範性に関する説得的な説明を示すことができるのか、との問いを掲げ、次の二点の擁護を試みた。

自然主義は、非自然主義者などの反対者によってその実在が疑われるような仕方では説明されない道徳の規範性について、より説得力のある実質的な説明を与えることに成功する考えであり、その意味で、他のメタ倫理説よりも理論的に優位な地位にある。

そのような形で明確にされた道徳の規範性が、われわれが偶然に持つ選好などに依存することなく、全ての人に課せられていることを、自然主義は成功裡に説明することができる。

本研究の目的は上述した自然主義による道徳の規範性の説明の擁護である。近年、自然主義の擁護を目指す論者たちは、上述した問題関心を共有しつつ、自然主義による道徳の規範性の説明に向けて、様々な提案を試みている。しかし、それらの提案はまだ萌芽的な段階に留まっており、総括的な検討は未だに現れていない。それは、自然主義者側からの提案は倫理学に留まらない哲学諸分野や関係する経験科学の分野における知見を必要としており、それらも踏まえた総合的な研究がまだ現れていないことに由来する。この欠点を補うべく、近年の自然主義的な諸提案を網羅的に検討・評価し、待ち望まれているそれら諸提案への経験科学的な肉付けを行うことが、本研究の先駆的な独自性である。

3. 研究の方法

本研究課題を遂行するために、次の三つの手順を踏んで達成していく。

手順 [1年目]: 自然主義者からの諸提案の調査・整理

手順 [2年目]: 関係する哲学諸分野・諸科学分野における知見の調査・整理

手順 [3年目]: 手順 1と手順 2によって得られた知見の総合

手順 1について、M・シュローダーに代表される規範性を人間の心理的な現象である欲求によって説明する自然主義的な試みを検討し、その内部においてどのような異なる形態があるのか、整理していく。

手順 2について、本研究において重要な部分である哲学以外の関連する諸分野に関して検討を行う。この過程では哲学と心理学の横断的な研究で知られる英国・カーディフ大学の研究者ら

に研究上の指導も仰ぎつつ、研究を進める。

手順 について、手順 と手順 で得られた知見を活用し、自然主義的な提案を精緻化し、自然主義へ向けられた様々な疑義に応え得る論証を構築していく。

4. 研究成果

研究計画に沿ってまず初年度は自然主義の立場から道德の規範性を説明する試みを提案する M・シュローダーの理論を検討し、その成果をまとめたものを編著書の中の一章として収録し、出版した(『メタ倫理学の最前線』『自然主義と非自然主義の論争について - 自然主義と道德の規範性からの反論を中心に』2019 年、勁草書房)。この中で、自然主義の枠組みでは説明が難しいと思われる道德の普遍性をシュローダーの説ではうまく説明できていることを確認しつつ、一方で、シュローダーの説では通常われわれが道德に求める強固な規範性を説明しきことはできていないとの結論を得た。なお、シュローダーは自身のメタ倫理学上の知見を認識論の分野にも拡張することを試みているが、この試みについても比較的長い書評を執筆するという形で検討した(“[Review Article] Mark Schroeder, *Reasons First* (Oxford University Press, 2021)”, *Tokyo Academic Review of Books*, vol.47)。また、上述の編著書については京都生命倫理学会において合評会が開催され、その内容が『豊田工業大学ディスカッションペーパー』(2021 年 3 月)に掲載され、それらを通して自然主義とその課題の理解の深化が図られた。

当初の研究計画では道德に関する形而上学的な問いに焦点を合わせて研究を進める予定であったが、自然主義とその反論者との間の論争においては認識論的な問題も重要な争点となることから、この点についても検討することとなった。その中で、日本倫理学会の主題別討議において「進化論的暴露論証を通して見るメタ倫理学の最前線」と題して(申請者を含む)三人の論者による発表を実施し、その成果が『倫理学年報』70 巻に掲載された。また、道德的直観に関する経験的な知見に訴える議論を検討し、その成果が『倫理学研究』第 51 巻に掲載された。

一方で、本研究課題と接続させる形で、国際共同研究加速基金の助成を受けられることとなり、当初は計画していなかった 1 年間のオックスフォード大学での在外研究を 2021 年から 22 年にかけて実施し、本研究課題のさらなる精緻化を図った。当初の計画では Kate Manne によって提案されている道德の規範性を身体的命法という概念によって説明する試みを集中的に検討することになっていたが、在外研究の期間中にオックスフォード大学や、当初から計画していたカーディフ大学の研究者らと様々に議論を重ねる中で、この提案の問題点が散見されるようになった。一方で、申請者が博士課程時から取り組んでいる道德的説明という提案に着目したより伝統的な手法の方が、実は自然主義者にとってより見込みがあるものであることが確認された。さらに、道德的説明に着目する提案は、多くの論争を引き起こしたものの、未だに決定的な評価は下されていないものであり、さらに注力するに値する分野であることも確認した。

このような研究計画の変更を経て、思弁的なものに留まる道德的説明に関する従来の提案を具体的な経験科学上の知見によって肉付けしていくという、申請者が「局所主義的な道德的説明の擁護(Localist Defence of Moral Explanations)」と呼ぶ新たな方法を着想するにいたった。この着想に従って研究を続けた結果、これまで哲学ではあまり着目されてこなかった比較政治学(comparative politics)における知見に着目した新たな道德的説明擁護の方法を構築し、その成果の一部を国際誌に発表することができた(“A Localist Turn for Defending Moral Explanations”, *Asian Journal of Philosophy* 1(2), 2022)。

本研究課題の実行を通して得られた「局所主義的な道德的説明の擁護」という着想を今後も深化させつつ実行していく予定である。この着想に基づいて執筆された英語論文はある国際誌に投稿中であり、また、2023 年度から新たに科研費・基盤研究(C)の支援を受けることにもなっており、さらに長期に渡って本研究プロジェクトを遂行していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 蝶名林亮	4. 巻 70
2. 論文標題 進化論的暴露論証を通して見るメタ倫理学の最前線（主題別討議報告）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理学年報	6. 最初と最後の頁 65-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 蝶名林亮	4. 巻 51
2. 論文標題 道徳的直観主義はどこまで経験的反論に耐えうるか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理学研究	6. 最初と最後の頁 18-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 蝶名林亮	4. 巻 20
2. 論文標題 伊勢田氏への応答	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 豊田工業大学ディスカッションペーパー	6. 最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 蝶名林亮	4. 巻 20
2. 論文標題 伊勢田氏への応答	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 豊田工業大学ディスカッションペーパー	6. 最初と最後の頁 51 - 62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 蝶名林亮	4. 巻 3478
2. 論文標題 書評：鈴木貴之（編）『実験哲学入門』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 5 - 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 蝶名林亮
2. 発表標題 永守氏へのコメント
3. 学会等名 創価大学・価値論研究会『カント 未成熟な人間のための思想』合評会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 蝶名林亮
2. 発表標題 道徳における直観主義はどこまで経験的知見に耐えうるか
3. 学会等名 関西倫理学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 蝶名林亮
2. 発表標題 メタ倫理学における進化論的暴露論証
3. 学会等名 日本倫理学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1．発表者名 Chonabayashi, Ryo
2．発表標題 Kinds of Normativity and First-Order Normative Theorizing
3．学会等名 The Fifth Southern Normativity Group Annual conference on Normativity (国際学会)
4．発表年 2019年

1．発表者名 蝶名林亮
2．発表標題 道徳の規範性を身体化する？ - 民主的ヒューム主義の是非を見定める -
3．学会等名 日本科学哲学会第52回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 蝶名林亮
2．発表標題 メタ倫理学における「ア・プリオリ」概念：自然主義者からの応答
3．学会等名 倫理における「ア・プリオリ」（招待講演）
4．発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1．著者名 蝶名林 亮	4．発行年 2019年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 368
3．書名 メタ倫理学の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 創価大学価値論研究会	開催年 2019年～2019年
----------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------